

KCELS

Newsletter No.13

MARCH 1998

第22回KCELS大会を終えて

—「参加してみよう」精神を—

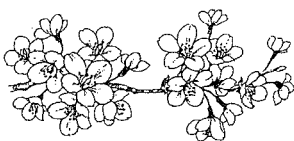
上 紀 子

早いものでKCELS (Kobe College Literary Society)の年次大会も今年度で22回目。今春社会に巣立っていく学生が生まれた年に発足したことになる。22年の歩みを振り返るとともに、4年間の大学生活を終えて卒業していく学生を思う時、KCELS大会に一度も参加せずに卒業になってしまった、という学生がいたら、それでは余りに勿体ないと思うのである。というのも、本大会では毎回、特別講演を持っているが、その講演にお招き出来た講師の先生方は、国内外で活躍されている著名な研究者であり、学内の小さな学会としては身に余る光栄で、本大会を何よりも充実したものとして下さっているからである。単位をとることが重要な受講目的となっている授業では得られないものがKCELS大会に参加することで学び又感じることが出来ると思うからである。

今回の特別講演は、アメリカ文学、特にTheodore Dreiserの研究では日本で第一人者の東京都立大学教授の村山淳彦氏をお迎えした。どちらかと言えば取り上げられることの少なかった作家ドライサーをめぐる人間味溢れる楽しいお話に、知的好奇心をそそられた学生も多かったと思う。卒論でひとつチャレンジしてみようと思った学生もきっといるに違いない。

本学博士課程修了の小杉世氏と、大阪大学博士過程の今泉志奈子氏の熱のこもった研究発表は本大会を更に盛り上げてくれた。

授業以外に容易に利用出来る多様な機会、「何でも見てやろう、参加してやろう」の弥次馬根性を大いに發揮してほしいと思う。来年度のKCELS大会のことを覚えて、まずは参加してみませんか？目から鱗が落ちるきっかけになる…かもしれません…から。



特別講演(要旨)

「ドライサーの女たち」

村 山 淳 彦

演題を、たとえば「ドライサーと女性たち」というようなもっと無難なものでなく、「ドライサーの女たち」としたのは、ドライサーと女性との孤独な関係を示唆しようとしたことである。「女性」という言葉と「女」という言葉とのあいだには、今日これらの言葉を用いるときにどうしても意識せざるをえないニュアンスの差がある。その差が、ドライサーと現代のフェミニズムとの微妙な関係を物語っていると考えたい。



ドライサー文学にとって女性が決定的に重要だった。彼の小説作品において女性が占める役割は、「冒険の詩学」がアメリカ文学におけるキャンノンの条件だったと言われることがあるアメリカ文学の伝統において、異例なほどに大きい。初期の小説『シスター・キャリー』、『ジェニー・ゲアハート』における女主人公は言うまでもなく、男性を主人公とするその他の小説においても、その男性たちの女好きの性格のために、女性の登場人物が重要な役割を担っている。『シスター・キャリー』や『ジェニー・ゲアハート』は、それまでのアメリカ文学で十分にあらわされることのなかった女工や女中 (the working girl あるいは the working-class woman) を描き、誘惑に屈したいわゆる「墮落した女」であるにもかかわらず、彼女たちを基本的には弁護している点に、

注目すべき特徴がある。

他方、作家ドライサーの女性遍歴は、生前から世間でしばしば嘲弄的のたされ、伝記においても重要な話題にされている。「ドライサーの女たち」としてあげられるのは、まず彼の家族である。自伝で美化されている母親への過剰な愛着は、俗に言うマザコンのあらわれでもあって、女性に対する彼の強い依存心にはこの母親の影が色濃く落ちている。また、姉たちは、貧しい家庭の雰囲気と宗教的、因襲的な父親に反逆して不良少女になり、キャリアやジェニーの物語は彼女たちの経験に取材して作られた。年上の妻との不幸な結婚も、結婚や家庭の制度に対する懐疑というドライサー文学の重要なテーマを提供したし、その後の彼の女性関係をいっそうこじらせた。ドライサーの愛人たちは、女性雑誌編集長時代からいつも従えていた何人もの秘書やタイピスト、あるいはその若い娘たち、さらにファンや弟子志願者、女優やボヘミアンなどであった。親戚の若い女性も含まれ、たとえば晩年に再婚した相手は、映画女優時代から長いあいだ関係を持っていた母方の親戚だった。

ドライサーを取り巻く女性たちは、彼に孤独の反応を示し、好意や賛辞を寄せている。注目すべきことに、彼との個人的な関係を素材にして書物を著した女性も少なくない。それらの書物からは、彼女たちもファザコンでドライサーを父親がわりとして必要としていたし、彼も保護と理解を惜しみなく与えていたことが窺える。ドライサーの作品は、これらの女性たちから素材を与えられたものも多く、彼女たちによるタイプ清書や本文編集の手助けなしにはどれも完成にこぎつけることができなかったかもしれないほどで、彼女たちの多くはドライサー文学の共同製作者だとさえ言えよう。

「ドライサーの女たち」という主題に関連して興味深い後期の作品に『女たちの画廊』(A Gallery of Women)がある。これは、主として1910年代のグレニッチ・ヴィレッジで知り合った、15名の女性たちに関する人物スケッチ集で、当時の反逆的な知識人のあいだで喧伝されていた「自由恋愛」、「新しい女」、「フロイト理論」などの新思想に影響されたインテリや芸術家の女性たちを描き出している。この本からもわかるように、ドライサーは、下層階級の女性を弁護しただけでなく、解放を求めながら抑圧から容易に抜け出せない知的な女性たちにも、共感のこもったまなざしを向けていた。

ドライサーがたえず女たちと親密になろうとしたことは、彼の淫乱さとして片づけるわけにはいかず、女性の魅力や生き方への深い関心のあらわれであり、時代と社会の特徴や作家の個性を読み解く手がかりになるものであると理解したい。同時にそれは、女性に対する抑圧を

描くことでアメリカ社会を批判しようとしたドライサー文学の一つの核心にも結びついている。そこには、ドライサーの個人史に由来する女性観の偏りや時代の限界も窺えるけれども、今日のフェミニストも共有できる問題意識が見られる。そういう点を現代の若い女性読者に受けとめてもらいたい。

研究発表(要旨)

V・ウルフと精神医学

—神谷美恵子とM・フーコーとの関連において—

小杉 世 (院E110)

ヴァージニア・ウルフの病跡研究で知られる精神科医、神谷美恵子は、フーコーを翻訳し、日本に紹介した人物でもある。神谷氏の業績のこれらの諸相は相互に深く関連し、フーコーをよむ神谷氏の内面には、たえず拮抗するベクトルがよみとれる。この発表では、神谷美恵子のヒューマニスティックなフーコー解釈を軸に、ウルフとフーコーを比較する。臨床医の立場から思想家フーコーを批判しながらも、神谷氏はアンチ・ヒューマニズムといわれるフーコーのテキストの中に「ヒューマニズムの契機」をみようとする。神谷氏は妄想症の癲病患者の症例分析をするときも、ウルフの小説中の精神病患者を論じるときも、同じ方法を用いた。患者の世界を内側から再構築しようとする人間学的アプローチとよばれる方法である。これを究極までおしすすめたのが、神谷氏が晩年、病床で書いたウルフ自叙伝試作である。自殺する直前の59歳のウルフが自らの人生を一人称で語るという設定のこの伝記には、対象とほとんど同化して語る神谷氏の声をきくことができる。

神谷氏は、フーコーがその初期の作品において、人間学派の精神医学の影響を受けていることに共感し、狂気を「人間性の重要な一面として」肯定的にとらえたフーコーを評価する。また神谷氏は、社会の不適合者として精神病患者を疎外してきた近代西洋産業社会のあやまちを告発したフーコーの業績に注目した。『ダロウェイ夫人』でウルフが描くのは、フーコーが医療の警察的機能とよんだものに対する批判である。18世紀に国家化された医療制度は「規範的人間」という概念を生んだ。均衡の感覚を万人に押しつけ、狂人を隔離し、イギリスを繁栄にみちびく精神科医ブラッドショーは、まさにその権化である。ウルフはこの「規範的人間」という幻想を破壊し、正気と狂気の相対化をはかった。

西洋医学の航跡を追って近代化をはかる戦後日本の医療の現場にいた神谷氏にとって、ヨーロッパの内部にお

いて近代西洋文明のたどった歴史を批判的にみつめたフーコーの視点は、自己批判の契機ともなり、日本の精神医学界の将来の方向を模索する指針を与えてくれたのではないだろうか。

日・英語の動詞における再帰的意味関係について

今泉志奈子 (大E111)

本発表では、最近の英語学研究における考え方を紹介しながら、英語の動詞があらわすさまざまな「再帰的意味関係」という視点から、従来、例外的な現象とみなされてきたものを含め、より広範囲の現象を統一的に扱うことを提案した。具体的には、まず、英語の動詞があらわす再帰的意味関係を、(1)動作主主語タイプと(2)対象主語タイプの二種に分類し、(1)に、文法的には他動詞で意味的には動作主と対象が偶然同一になった再帰用法、動作主と対象の同定が既に語彙レベルで指名され、文法的には自動詞としてふるまうdressタイプの再帰動詞(a)、意味的には再帰動詞(a)と同じ関係を示すが、他動詞構造を保ち、義務的に再帰目的語を要求するabsentタイプの再帰動詞(b)の3タイプを認めることで、これらの動詞のふるまいの違いが適切に予測、説明されることを示した。さらに、(2)の例としては、中間構文(ex. The door opens easily.)、再帰中間構文(ex. The door opens ITSELF.)を挙げ、これらが必ずしも特異な現象ではないことを述べた。最後に、こういった再帰的意味関係に注目することが、日本語の動詞の、自動詞と他動詞の対応の現象にも、新たな視点を与えるものであることを述べた。日本語は、自・他動詞が形態上ははっきりと区別される点に英語との違いがあるが、自動詞の一部に「波が寄せる」「二位につける」など、他動詞用法と形態上の違いが見られないものが観察されることを指摘し、これらが英語の再帰中間構文や、再帰動詞(a)に対応するものではないかと提案した。さらに、他動詞「出す」と結合しているながら、全体としては自動詞としてふるまう日本語の複合語「逃げ出す」等を取り上げ、こういった複合動詞をつくる合成のプロセスにも同様の再帰的意味関係が成立していることを示した。以上より、動詞の意味表示に注目するアプローチによって、系統的にも違い言語どうしの、全く無関係に見える現象にもある程度のつながりが見えてくるのではないかと主張した。

キャンパスニュース

*金城盛紀教授(1974年に着任)は、本年3月末に定年ご退職され、名誉教授とされます。

*Maurice Harmon客員教授は、1年間の任期を終えられ、本年3月に英国へ帰国されます。

*Alastair Colin Lys Henderson氏が、その後任の客員教授として、本年4月に就任されます。

*Troy H. Titterington専任講師は、本年3月末に2年間の任期を終えられます。

*Kristen Carolyn Doherty氏が、その後任の専任講師として、本年4月に就任されます。

記念奨学金

学業・人物共に優れた3回生の学生を対象とした名誉奨学金が、以下の通り2名の学生に授与されました。

大沢幸恵奨学金 石野 尚

デフォレスト奨学金 宮脇 淳子

訃報

元本学科教授山口秀夫先生が1997年4月16日に御逝去されました。享年90歳。天上の平安をお祈り致します。

国際学会発表

*Barbara Leigh Cooney氏

“Visions of Peace”:A Classroom Video Production
June 97 at Consortium of Peace Research, Education
and Development at Georgetown Univ. Wash, DC, USA

“Visions of Peace:A Classroom Video Production”
Oct 97 at Japan Assoc. Language Teachers(JALT) Hamamatsu,
Japan

“Envisioning Peace via Classroom Video Production”
March 98 at Teachers of English to Speakers of Other
Languages(TESOL)at Seattle Wash, USA

*風呂本樟子氏

北京大学&中国社会科学院主催 日中女性史研究シン
ポジウム 1997年5月12~17日、於 北京环境保护培
訓中心

タイトル:「歴史」を紡ぎだすアメリカ黒人女性作家
たちの試み

*Warren Frerichs氏

Conference:Theater and Pedagogy of the Oppressed,
Panel Discussion:Practice What You Teach, Paper: Marketing
Dominance and the Social Erotics of Sacrifice, Omaha,
Nebraska, USA 19-20 April, 1997

*東森 勲氏

オランダのFree University of Amsterdamで開催され
た5th International Cognitive Linguistics Conference
(1997年7月)において研究発表。

* 平井雅子氏

Paper: "Tanizaki and Lawrence: The Novels of Mother-Son Love," delivered at ICLA (International Comparative Literature Association) Aug' 97 Conference at Leiden, Holland

会員による出版紹介

◇ Catherine Vreeland氏

"Multiculturalism and Multimedia in the Literature/Language Classroom" Paper delivered to the 13th Computers and Writing Conference, Kapi'olani Community College, Honolulu, Hawaii, June 6, 1997.

◇ Catherine Broderick氏

"Cities of Her Own Invention: Urban Iconology in *Cities of the Interior*." in *Anais Nin: Literary Perspectives*, ed. Suzanne Nalbantian. London: Macmillan Press, Ltd. and New York: St. Martin's Press, 1997.

◇ 風呂本惇子氏

『黒人文学とその周辺』(共著、南雲堂フェニックス 1997年4月刊)
『アメリカ研究とジェンダー』(共著、世界思想社 1997年8月刊)
『文学とアメリカの夢』(共著、英宝社1997年9月刊)
『愛と哀—アメリカ黒人女性労働史』(ジャクリン・ジョーンズ著共訳、学芸書林 1997年5月刊) 翻訳文化奨励賞受賞

◇ 石川有香氏

『英語科授業学の今日的課題』
(江利川春雄他編、共著 金星堂 1997年11月)

◇ 金城盛紀氏

『花のイギリス文学』(研究社 1997年5月)

◇ 東森 勲氏

Discourse and Perspectives in Cognitive Linguistics
W.-A. Liebert 他編、共著 Amsterdam: John Benjamins
1997年12月 (Current Issues in Linguistic Theory 151)

◇ 平井雅子氏

Sisters in Literature: Female Sexuality in Antigone, Middlemarch, Howards End and Women in Love. Macmillan,
1998年3月刊 (U. K. and U. S. A)

◇ 伊藤栄子氏

『英語語源辞典』(共著、研究社 1997年6月)

◇ 三杉圭子氏・難波江和英氏・内田樹氏・飯田祐子氏・

浜下昌宏氏・石川康弘氏
「移民とトランスボーダー」(共同研究・ブックレット形式 神戸女学院大学研究所 1998年1月)

神戸女学院大学英文学会 会則

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英文学会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費など経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCELS専用の口座を利用する。

1995年4月1日施行

編集後記

会員消息、出版物等多数お知らせ頂きありがとうございました。会員の皆様方の御協力に感謝致します。

KCELS Newsletter編集委員

(1997年度運営委員)

- ◇ A. Banerjee ◇ 風呂本惇子 ◇ 正木芳子 ◇ 溝口 薫
◇ 難波江和英 ◇ 上 紀子 (ABC順)

KCELS Newsletter No. 13

編集発行 神戸女学院大学英文学会
〒662-8505 西宮市岡田山4-1
Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532